

平成 18 年度 北海道支部大会記録

基調講演「地域生活文化としての花のランドスケープ創造における企業の役割」

庄司 昭夫 株式会社アレフ代表取締役社長

私たちアレフという会社は、手段としての存在です。企業は社会の中に存在し、その中にある不足、不満、問題を補ったり、解決したりすることに存在根拠があります。つまり会社は世の中で役割を果たすための手段というわけです。

アレフは北海道から沖縄まで、全国で約 300 店舗のレストランを展開していますが、2006 年 6 月には恵庭市内にガーデニングと農業・環境への取り組みを具体化した「えこりん村」をオープンしました。これから未来に向かって、アレフはどうなっていかなければならないか、真剣に考えて、思いをぐっと集約する場所として恵庭を選んだわけです。いまの世の中を見ていると、こうはなりたくないな、と思うような社会にどんどんなっている気がしてならないのですが、そんな中で、今日このように「花」をテーマに人が集い、いろいろと話ができることは、なんと幸せなことだろうと感じています。

食糧輸入、もう一つの視点

外食業は一時期 29 兆円くらいまで市場が伸びました。しかし、食についてのさまざまな問題が起こった結果、現在ではおよそ 25 兆円へと後退しています。このままではダメなんだというシグナルが、あちらこちらで鳴っている状態です。アレフもそうですが、アメリカに学び、アメリカのまねをしてやってきて、店数を増やしてきましたけれど、そのことに待ったがかかっている時期なんだと思います。皆さんもご存じの BSE 問題一つ取りましても、一部輸入再開になりましたが、牛肉を輸入することが本当にいいことなのかどうかは別問題です。

アメリカは日本に牛肉や、牛の飼料を輸出していますが、それはアメリカ自身が困る状況へとつながるんです。どういうことかと申しますと、地下水を使って餌となるトウモロコシを作り牛肉を生産していますが、その地下水は枯渇の危機です。実際、カンザスシティでは子孫に貴重な水資源を残すこともできなくなる

ほど地下水を使い果たしてよいのかどうか問われていますと聞きます。牛肉の輸入には、そんな側面もあるわけです。アメリカで BSE が発生して輸入ストップになって、オーストラリアの牛肉へとシフトが進みましたが、私の知る外食業の仲間の多くが、アメリカ産の輸入再開を望んでいます。オーストラリアの牛肉は味が落ちると言うのです。アメリカの牛はトウモロコシを食べさせていますが、オーストラリアの牛は麦を食べて育つのでフレーバーが違くと。ところがトウモロコシは、夏場の暑い盛りにぐっと成長するのですが、このとき水をたくさん必要とします。だから地下水をいっぱい汲み上げなくてはならず、カンザスシティでは場所によっては半分以上、7～9割の水がなくなってしまったと言います。完全になくなった所もあるようです。つまり、飼料をはじめ穀物や牛肉を輸入するという事は水を輸入することと同じことなわけです。水不足が叫ばれる世界で、まるで日本が水を独占しているようです。食料戦争・水戦争が起きると言われる時代にあつてです。

一方、アメリカの農業は食料よりエネルギーを作ったほうが良いと、変わり始めています。エタノールなどアルコールを作るためのトウモロコシを栽培するように、畑の目的が変わって来ました。しかし、日本の畜産業はまだ輸入穀物に依存しきっている状態。いつかアメリカがもう穀物は輸出できない、となったとき、果たしてだいじょうぶなのでしょう。

食をとりまく問題

日本ではいま、国民の 11%が糖尿病、13%がアトピー、そして 20 代の女性の 24%が栄養失調、7 割以上がカルシウム不足で、7 人中 6 人に何らかの異常があると言われていています。若い男性の精子が減ったり奇形になったりしているとも聞きます。これは食の問題とつながっていると思います。

農薬、除草剤をまきますと作物にも効いてしまうからと、遺伝子組み換えをします。日本でもまねしたが

る人がいますが、あれはもともとヘリコプターで農薬をまくような大規模な農業向けです。日本の農業も大規模化をめざしていますが、国土の広さの違いは歴然です。アメリカにふさわしい農業スタイルで、日本が勝負して勝てるでしょうか。日本の狭い農地で遺伝子組み換え作物を作って、ヘリコプターで農薬をまきますか？たとえそれで隣近所との競争にはかろうじて勝てたとしても、海外との競争には勝てないでしょう。

なんでも大きければいいのでしょうか。外食業には年商何千億という企業が出ていますし、流通業も何兆円規模の企業が出てきています。でも、それで社会がよくなったでしょうか。私から見ると、何もよくなっていない。企業が成長・発展することは社会にとってありがたい迷惑かもしれないとすら思うんです。このまま進んでいったら、地球はどうなってしまうのでしょうか。一つの商品を売るためにどれだけの環境を壊したか、企業は認識しなければならぬ時代なのです。求められているのは、成長・発展ではなく 21 世紀にふさわしい形への進化です。

不足より、無駄使いの問題

日本は人口が減っています。減少を心配して、増やすにはどうするか、移民の議論もされているようですが、世界をみると人口増が大問題です。2030 年には中国の人口が 14 億 5000 万人を超えるとされ、そのころにはインドの人口が中国を抜くだろうとも言われています。発展途上国の人口は 2050 年には 90 億になるとの計算もあります。そんなに増えたらどうしようというのが、先進国と呼ばれる国々の心配の種です。食料はどうでしょう。

中国といえば、いま平均年収 55 万円くらいですが、これが 400 万円くらいにまでなろうという勢いです。年の成長率は 8%、9%。その成長が続くと 2030 年にはどうなっているかという、いま地球で生産している全ての穀類の 7 割を増産しなければなりません。紙の原料となる木も、石油も、いまの倍以上必要となります。つまり、地球が一つではたりないということです。20 世紀のパラダイム、価値基準で成長・発展するには、地球が 4 個か 5 個は必要になるようです。

発展途上国の人口増が問題とされていますが、実はそれより文明国と言われている所のほうが問題は大きいのです。アメリカの乳児一人が 1 年間に使用する資源は、インドの乳児 50 人分に当たる。つまり、物の不

足ということより無駄使いのほうが大きな問題です。それを考えると国民総生産とか、そういったままで基準で世の中を見ること自体がどうなのか、問われ始めていると思うんです。いままでに大きくなった企業は、本当にそのままでもいいのか、問われ始めています。将来どうなるのか、ちゃんと答えを出している企業のなんと少ないことか。恵庭は未来に向けて「花」というテーマをもっています。幸せなことです。

企業は、経営に長けており、計算もしっかりできていると思われていますが、実際はそうでもない。いま問題とされるコストは何か、社会コスト、環境コストを考えているところは少ないです。例えば、車を作ったら、その車によって吐き出される二酸化炭素くらいは自分で責任取れよと言いたいわけです。自分で責任取らないで、国の税金で補おうとする。本当は企業が責任取るべきところを国民が働いて稼いで補う、そんな負担を強いて成り立つ企業は間接的には補助金をもらっていることになります。保護詐欺と呼びたいですね。

日本は経済大国と言われていますが、本当にそうでしょうか。約 840 兆円の借金、国民一人当たり 655 万円以上の借金を背負っている。42 兆円の収入しかないのに 80 兆円以上の支出が決まっています。毎年 40 兆円くらいの借金がたまり続けている国が経済大国ですか？不経済大国ですよ。市場経済の象徴的な国、アメリカも 400 兆円も使うのに 160 兆円しか収入がありません。日本よりひどいですね。アインシュタインが言っています。「問題を作り出したのと同じ方法で、その問題を解決するということはできない」。このまま 20 世紀の延長で迎える先、それが本当にいいのかどうか問われています。それはもう、なりたくはない未来だと思うんですが。

「ごみ処理」はナンセンス

アレフの中ではコストが上がってきていて、もうこれ以上コストを下げることはほとんどできないと思います。周りはコスト増の要因ばかりです。例えば、中国では需要が拡大していますが、これに対して供給は逆に減っています。中国にはイギリスとフランスの全耕作地に匹敵するくらいの耕作地があると言われますが、そこが道路や工場へと変わり続けています。中国では水不足も深刻ですね。アメリカも穀物をエネルギーに利用する政策に転換してから人口がどんどん増え

ているのに農産物供給が減っています。エネルギーの問題では、アレフでも 8000 万円くらい原油高の影響でコストアップになっています。それに対してアレフでは環境問題に取り組むことで、5000 万円くらいまではどうにか解決つけてきました。

生ゴミのリサイクルもしています。以前は業者さんが毎日店舗へごみ回収に来ましたが、いまでは 2 か月に一度くらいで済むようになり、運搬に使う燃料を節約できました。生ゴミは堆肥にしているのですが、ただ肥料にするにはもったいない。途中でエネルギーを取っても、栄養源は残ります。いま、ビールかす、豆腐を作る際に出るおから、店舗の生ゴミなどを集めてメタンガスを作り、それをタンクに詰めて使う工夫をしています。養豚場や酪農施設は全国にけっこうありますが、どこも糞尿処理で困っています。環境汚染だとも言われて。でも、それは栄養源でありエネルギー源なんです。メタンガスの加工施設を造って、できたメタンガスをびっくりドンキーで使えるようにして、そしてガスを取った後に残った栄養のある液を畑に循環させてみると、素晴らしい結果が得られました。牧草も大量に増産できています。また、えこりん村で業務用として走っている車の 3 分の 1 は、自分たちで植物から搾った油で動いています。店舗への配送車も 2 割が廃食油を精製して燃料に変えたもので走っています。いままでは環境汚染につながっていたものが発想の転換で使えるものになります。もったいないです。捨てるものなんて全然ないですよ。

私は「ごみ処理」という言葉自体がナンセンスだと思います。大量のごみを処理する施設を造るなんて、それこそもったいない。大型ごみ処理施設を造るということは、ごみがたくさんなければ困る原因をつくることです。そんな投資をしても、循環社会が進んで、ごみがなくなったらどうするんでしょう。ところが、国は石油が高くなったから国の石油の値段を常識としてとらえるのはやめよう、3 倍くらいはする計算でやろうとか、そういうことを考えている。いま、大変なお金を投じて石油を守っているのではないのでしょうか。だいたい、エネルギーの研究へ 31 兆円を超える予算を取ってはいますが、ほとんどは原子力発電の研究費に消えています。クリーンエネルギーを作っている方から見れば、そのお金をくれとは言わないけれど、フェアな競争をさせてほしいということになるでしょう。片方にばかり予算を割くのではなく、そっちもなくてくれと。そうすればフェアな競争ができるよ。

人も社会も変わらなければならない

人間も生態系の一部です。人間の体にはミトコンドリアがたくさん、ほとんどミトコンドリアでできているようなものだと言われますね。生物はミトコンドリアのおかげで酸素からエネルギーを生産できています。酸素は、バクテリアが活動を始めて生まれたようですね。もともとは酸素は生物にとっては猛毒ですから、生物は絶滅するかもしれないと言います。ところがバクテリアが、その酸素を接種して自分たちが必要なものを吐き出すように進化した。その進化の先に動物や人間があるようです。進化論生物学者の中には、人間は岩から生まれ、死んだらまた岩に戻ると言う人もいます。人間をつくっていた物質は、死んだ後で岩になり、それがバクテリアの働きでまた人間が摂取できるようになるのだと。だから、岩に言わせれば、地球をつくり維持させているのは自分たちだということになるろうと。植物も植物に必要なものを摂取するために昆虫などを必要としたわけです。そして、自分で動けるように進化する必要があつて、その結果動物が生まれてきた。すると今度は、植物に言わせれば、地球をつくり維持させているのは自分たちだ、人間に酸素や水を供給しているのは自分たちだと。総合進化論のアーヴィン・ラズロ博士は、人間は真空から生まれてきたと言っています。真空であったとき、人間が生まれるすべての原因がその中にあったということです。

人間はいま、進化せざるをえない段階にさしかかっているとされます。進化と言ってもいろいろあります。ものとしての進化、生物としての進化、そして人間の歴史にみる社会としての進化。社会の進化は、前もってそれを全部描くことはできません。20 世紀のやり方では限界が来て、変わらざるをえない。進化のための環境はすっかり揃っているのです。このままではだめだとわかっている人たちが出てきて、まず進化を遂げると言われます。その人たちが盛んにチャレンジして、何か一つ変わり始め、やがて一気に変化する。いま変わらなければならないものはたくさんありますね。企業もただ利益を追求しているだけじゃだめです。人間の幸せとか健康を優先した利益があつてもいいと思うのです。これまで、日本とか世界とか、全体のことを考えずに、自分のことしか考えてこなかった、その事実を認識しなければならないでしょう。

使命感がすべての根底

ある映画監督と対談したときに聞いた話です。モンゴルのゴウクンで念願の撮影をしたとき、一つのゲル（遊牧民の移動式住居）から夜、女の子が出てきたそうです。その子は毎晩星空を眺めている。監督は、撮影が終わり、もう帰国というときにその子にどうしたのかを聞いてみた。すると、弟が病気で死んでしまい、悲しくて眠れない、だから毎日ここでお星さまを見ているのだという答えが返ってきた。そして別れ際、その子は監督に言ったそうです。「私、お医者さんになる」と。草原の真ん中、学校も病院もないエリアです。日本とかアメリカとかの子どもだと、パイロットとか宇宙飛行士とか、なにか「自分発」で何になりたいかというでしょう。でも彼女は、自分になりたいというより、弟という自分以外を原因として、私はこうなると宣言しているんです。まさに、使命感ですね。いま世界中の問題はここに尽きるのではないかと感じています。企業も使命感より自分のことばかりを考えてやっているから、地球環境にも大きな負担を強いています。

チェーンストアを始めるときに人生観、使命感として大切なことを教わりました。事業をするにも三つの段階があるということです。一つ目は「生業」。誰にでも生きる権利があるということです。でも、そのために一生懸命、奥さんも子どもも低賃金、重労働でこきつかわれてきました。それがある程度伸びてきて奥さんにも楽をさせたい、子どもにも教育を受けさせなければということまで「家業」が意識として生まれてきます。そして、それ以上に大きくなって、とても家族だけでは成り立たず従業員を集めなければならなくなったとき「事業」になります。社会のためという意識を共有し、進める段階です。

ところが、東洋にはその上の考え方があったのです。それは四段階に分けられていて、「事業」は最も下位です。それは欲と能力で成り立つ仕事と位置づけられています。その上に、同じ仕事でも自分のお金稼ぎではなく人間の尊厳がにじみ出ている仕事「徳業」があります。少しましな事業になると、人間臭さとか人間らしさがあるということです。大抵は、やっている人に似た会社なり店なりができあがりますね。さらにその上にあるのは「道業」。それは天地自然に逆らわずに調和して生きる生き方としての道、仕事です。言ってみれば理念を持っているとかそういったことです。使命感をもつとかですね。そして、最上位は「天業」。

人と自然が一体となって、互いに生かす、そんな仕事です。

生態学的企業へ

事業をするにおいては、生態学的な企業をめざしています。生物多様性で言う「多様性」へのいい答えになるような、ですね。小売店でもなんでも同じ、多様性がなかったら未来は築けないと思います。さきほど話したように、行き詰まったときに進化して新しいものが生まれるにも、そのなかに価値観を見いだせるようなものが生まれなければだめです。そのためには多様性があるかどうかです。生態学的に多様性というのは生きるためのシステムなんです。いいか悪いかの問題ではなく生きるための必須です。その点、ガーデニングは、すべてを大きく含んでいますから、いろいろと教えてくれますね。

アレフも教育にお米づくりや農業を取り入れていきます。入社するときは経済界だと思って入ってくるんですがね。社内には、果敢に環境とか社会の問題に取り組んでいる人がたくさんいます。それを可能にする手段としての経済面も大切にしています。最近では環境意識をもった人の入社も多くなりました。

アレフでは「ふゆみず田んぼ」に取り組んでいます。専任も4人くらいいます。若い社員が二人いるんですが、そのうちの一人は北大の大学院卒の女性です。ニトリさんの紹介で入社してきました。ニトリさんが北海学園大学の寄付講座をやっていて、私も講師として呼ばれたりしていて、社長と会って話しをするうちに「面接に来て、トイレの話ばかりする人がいる。うちよりアレフさんに合いそうだ」と紹介されたのです。そうして面接を試みたら、本当に一生懸命トイレの話ばかりする。面白かったですね。その女性が入社したんですが、「ふゆみず田んぼ」の話になると、もう化学式とかいっぱい出して、それはそれは頑張っちゃう。もう一人は、東大出身で、いま農業やっています。現代的な経営学をめざしたことやってるより、農業のほうに役に立つのじゃないかと提案したら、のめりこんでいますね。農業試験場で現場経験を積んだベテランも入りましたし、獣医さんも入りました。そういった生物に詳しい専門家たちが集まって、地域の子もたちと一緒に生態調査をしたりしながら田んぼをやっています。生態系を生かした田んぼづくりの指導者も2名、毎月招いています。興味のある方がいらしたら、

連絡いただければ一緒に勉強できます。実際、自分たちだけで勉強してももったいないと、声をかけたら、一緒に取り組もうという人たち、優秀な農家さんたちが出てきました。

生態系を生かした「ふゆみず田んぼ」

「ふゆみず田んぼ」というのは、基本的には冬季も水を張っておく田んぼのことです。生態系を生かしてお米を作る農法の一つです。田んぼの中ではイトミミズなどが一年中働いてくれます。イトミミズが一日中休みなく出す糞は窒素肥料です。バクテリアもいっぱい増え、おたまじゃくしやヤゴが姿を現し、虫が増えるとクモも増えます。クモの巣が張られると、カメムシ退治もしなくてよくなるのです。北海道はいまカメムシで悩んでいます。カメムシの天敵はクモですが、それを人間が退治してくれているから、カメムシにはパラダイスですよ。それでカメムシが増えて困るといって殺虫剤をまく。カメムシがいなくなるとどうなるかという、アブラムシが増えます。人間ってあんまり利口じゃないですね。こんなこと繰り返しているのです。農薬いっぱいまくのです。農薬もほとんどアメリカからの輸入なので、アメリカが喜ぶますね。農薬だけじゃありません。化学肥料もやらずに。これもアメリカから買っていますね。農協さんの全収入の8%が化学肥料と農薬の売上げで、何百億円も利益出しているらしいです。農薬いっぱいまいて、作物にも効いちゃうからって遺伝子組み換えする。そうやって農業をだめにしてしまうんです。

そんなに大規模にやらなければ、雑草がはえたとこで自分でどうにかできます。イトミミズがたくさん働くと、層をつくってくれて、太陽の光を遮るから雑草もはえなくなります。そこに稲を植えると、稲にはいい肥料になります。これだと化学肥料はいらない、農薬もいらない、そして水もきれいになります。水がきれいになると、当然のことながら本来の生態系が戻ってきます。そうすると、そこが子どもたちの教室、学校になります。私の子どもたちの遊び場も田んぼでした。裸足で入りましたよ。ドジョウもたくさんいました。でもいまは子どもたちを裸足で入れていいのか、考えてしまうような水の汚れた田んぼが多い。人の使った田んぼの水は使えないって捨てられていますし、自分の田んぼで使った水さえ捨てています。だから水がたくさん必要なのです。生態系がちゃんとして

いた昔、田んぼの水はきれいでした。循環させて使うことができ、いまのようにたくさんの水を必要としませんでした。それをまたやればいいんです。そうすれば持続可能な農業ができます。

慣行農法では、いま一生懸命田んぼに化学肥料をまいていますけれど、米は窒素を吸えば吸うほどまぶくなるのがわかっているから、あまり吸ってほしくない、なんて言いながらまいている状態です。窒素肥料は化学変化で亜硝酸とアンモニウムになります。アンモニウムは米が少し吸収しますが、亜硝酸は吸収しません。米が吸いもせず、吸っては困るものを一生懸命まいているのです。不思議ですよ。カメムシの天敵を減らして、カメムシを増やしているのも不思議、水を汚していっぱい使うようにして水不足を言っているのも不思議です。

「ふゆみず田んぼ」で作る米は安全ですから、私もいつも食べているのはその米です。「ふゆみず田んぼ」は、子どもの遊び場であり、学校であり、面白い人材がいっぱい集まって、コミュニティが活性化します。そうすると物としての米を作る以上の意味をもってきますよ。農業全体がそうになっていくやりかただと思えるんです。

何事にも多様性を

米は、私たち外食業から見ると、リゾットやパエリアに向けた米を探してもない。米が余るから減反だっって言っていますけど、皆白米で食べる米しか作ってない。そればかり作るから余る。スープにも米は使えるし、お菓子やサラダにだって使えます。古代米、黒米、赤米もあります。そんなのでうどん作ったら面白いうどんできそうですね。パスタだって、小麦だけで作るには限らない。米の粘り気がダメだというなら、ぱさぱさで旨くないからって試験場の蔵にしまわれたままの中に宝があるのではないのでしょうか。そんな実験を始めています。アレフにはイタリアンの店もあるのですが、そこで出すパスタをすべて国産の穀類を使ったものに置き換えられないかなと考えています。

牛乳もそうですね。作ってないチーズが多すぎる。全体の種類の3分の1も作っていないのではないのでしょうか。チーズって一口にいても70種類はあるんですよ。そのほとんどを作ろうともしないで、飲料としての牛乳ばかりやっています。せいぜいバターにするくらい。牛乳とバターだけでは大変です。生鮮飲料で

すから、廃棄も多い。チーズは保存効きますから、好きな時期に売れるようなチーズを作ればいいのです。そうやって捨てているのに、外からいっぱい買っているというのも矛盾ですね。

イタリアでスーパーに入るといろいろな種類の米があります。白米もあるけど、スープ用とかパエリア用とか。そんな多様性も大切だと思うんです。おいしくないって言われて、どこかに放っておかれているものの中には、もしかするといっぱい宝があるかもしれません。それを探り当てるような努力も、してみる価値があるのではないのでしょうか。

食のスタイルの見直し

食糧危機が言われていますね。でも、アメリカは1キログラムの牛肉を作るために牛に14キログラムの穀類を食べさせています。専門家によって11キログラムとも14キログラムとも17キログラムとも言われていますが、中をとって14キログラムということにしておきます。そして自給率。自給率はカロリー計算ですから、1キログラムの牛肉と14キログラムの穀類とのカロリーはどっちが多いですかという計算をするわけです。すると14キログラムの穀類のほうがずっとカロリーが多いとなる。だったら牛肉を食べないか、飼料ではなく牛肉で輸入したほうが自給率アップには貢献できるのかと。豚肉1キログラムは7キログラムの穀類、鳥肉1キログラムは3キログラムの穀類からできます。アメリカンスタイルの牛肉偏重は見直したほうがいいですね。食においてはアメリカの真似から抜け出す必要があると思います。

韓国に行きますと、あちらの人はキムチを本当によく食べます。キムチは発酵食品ですね。野菜を発酵食品で食べると量もたくさん食べられるし、体にいい。日本の倍以上の野菜を食べているんじゃないでしょうか。発酵食品は、もっともっと研究したほうがいいなと思っています。韓国では肉を食べるときも葉に包みますね。ごまの葉に包んで、油を取るんです。私たちが畑でエゴマを植えています。織田信長の義父の斎藤道三は油売りで有名ですが、彼が売っていた油はエゴマの油なのです。それは食料にもなるし、火をつけられそうそく代わりになるし、塗料の代わりにもなります。いま、方丈庵（ほうじょうあん）という4畳半ほどの組み立て式の建物を造っているのですが、その塗装にはエゴマの油を使っています。実にいろんな使い方ができます。葉を取って食べて、油を搾って食べて、使い終わった油を廃油精製してエネルギーに。循環で

す。

生態系の一員として

人間も生態系の一部ですから、摂取したものを出すときにはいいものを出す責任があります。生態系の他の生物が使えないゴミ、きたくない物にして出してしまうのはダメなのです。先程も言いましたが、自分で環境を壊している人間はいま、進化できるかどうかを問われている。バクテリア程度になれるのかってことが問われている。人間の体はミトコンドリアでできていると言いますが、実はそうじゃなくて、ミトコンドリアが人間の体で移動したりするのに便利だからまるでタクシー代わりに使っているって考え方も成り立つんじゃないでしょうか。人間は浅知恵で、頭で考えて、なんでも自分たち人間がやっていると思っているけれど、実際は、人間が感じているのではなく、ミトコンドリアが周りの環境や世界を感じてくれているのかもしれない。そんな考え方もあります。

進化ということでは、ガーデニングをテーマにまちの特徴を据えていくと、まち自体が上級のものになってくると思います。皆が勉強を始める。未来に向けたものの勉強をする環境ができあがってくるんじゃないだろうかと考えます。

アメリカの食料戦略と日本

「えこりん村」の無料のゾーンにキッチンガーデンがあります。国は食料危機だからと大規模化ばかり狙っていますが、スモールメリットが大事な場合もあります。大規模化すると、アメリカと同じような競争をしないってことになる。大変ですね。はじめから負けているでしょ。土地がない。日本の大規模はアメリカの零細です。どうして勝てない競争に突入するんでしょう。日本の酪農のありかたもそうですね。アメリカだってはじめは牧草を食べさせて牛を育てていたのです。スイスの山奥などでは牛は雑草を食べて育っています。牛は自分で食べたい草を選んで食べますが、体調が悪いときはちゃんと薬草の類を選びます。私たち人間は、そこまで自分の体の調子を把握できるでしょうか。無理ですよ。

草であれば繊維質があります。牛は繊維質を食べるようにできているから、ご存じのように胃が四つあります。繊維質を消化するためです。ところがいまの牛

は人間と同じような粉状のものを食べていますから、胃は四つもいらぬ。だから三つほどはプラスチックの玉を入れてごまかしているのです。8割は病気をもっていると言われます。白い突起を切ると膿がぼーっと出てくる、そんな内臓、食べられませんね。豚の内臓も怖い。病気のもの食べたら病気が出てくるのではないのでしょうか。皆さんが有機だと思っている作物が本当に有機と言えるのかを知るにも、そんな知識が必要です。有機作物っていうからには有機質の肥料をやらなきゃいけないでしょ。牛の糞をまけばそれで有機質になるかっていうと、そうじゃないわけ。す。

アメリカはペンタゴンで食料戦略立てています。いろんな食料を供給し、コントロールすることで相手を支配しようという考え方に基づいています。だから、相手が困ろうがおかまいなし、自分たちの都合で供給をストップしたりします。そのために補助金を出しても、安くして輸出します。そうすると相手の国の農業が太刀打ちできなくなって滅びるのです。そうなれば、しめたものですよ。ゆっくり売れます。好きなように売れます。

そういう戦略に基づいてアメリカは食料をいっぱい作り始めた。そうしたら穀類もいっぱいできた。ところが需要が育たなかったために余りました。保存にもコストがかかるから、製品に変えるほうがいいだろうということで、牛に食べさせ始めたわけ。それを機に一気に合理化が進みました。ダンプカーで餌をまいて、一カ所で合理的に餌を食べさせる方法として生まれたのが、フリーストールと言われている方法です。日本はそうする餌もないのに、その方法だけを持ってきて、いま日本中で行われている牛の飼育方法になりました。日本は雨も多く、寒い冬もありますから、牛舎を造らなければならなかった。牛舎にコストがかかるから、牛をいっぱい詰め込まないと採算が合いません。そうすると不衛生になるから抗生物質がたくさん必要になる。抗生物質をたくさん与えて育った牛の糞尿には抗生物質がたくさん含まれています。有機と言っても、そんな糞尿をまいた畑でできた野菜や穀物を食べ続けたらどうなりますか？薬効がなくなりますよ。つまり、有機家畜って呼べるようなものがなければ有機肥料はできないわけで、有機肥料を使わなければ有機作物はできないってことです。

個性とはなにか

店舗については、日本全国どこの店も、一年中同じように売れなきゃダメとしなくてもいいんじゃないかという考え方をもつようになりました。韓国ではドリンクが夏と冬とで違って、しかも種類も多いのに感心しました。食事の後に飲むお茶も、夏には夏の飲み物になっていて、面白いです。穀物をローストした穀物茶もあって、それはちょっとした流動食代わりになるものでした。ふと日本を振り返ってみると、どこのファストフードもファミリーレストランもコーラとオレンジジュースだけは必ずあるな、と。何もかもアメリカの真似して、そのままです。ショッピングセンターもそうですね。あれは40キロ離れた場所から買い物に来るのに都合のいいシステムです。たまにしか来られないから、いろんな物が1か所で調達できるようになっています。1週間分のまとめ買いだということで、大きな冷蔵庫が必要になる。そんなアメリカの生活スタイルに合っているのです。そちらにすべてを変えれば、アメリカは競争しやすいですよ。コーヒーショップも、なにもかも。

でも、地方なんかでも、小さい店がちゃんと成長すれば、小さな農家も成り立ってくると思うんです。小さいところにしかできないこともあります。大きな流通業が進出してきても地元から仕入れなんてしないですよ。外の生産地にすぐシフトしてしまいます。そして売上げだけでもっていかれます。それより、小さくて個性的な商店が育ったほうがいいんです。

では、個性って何でしょう。風土ってことじゃないのでしょうか。遠くの借り物ではなく、自分たちらしいものを生み出す。それだったら競争になるのです。

韓国は、日本に負けるなという意気込みで欧米化を急いだせいか、いい意味でも悪い意味でも日本を追い越しました。自給率は21%しかありません。そこまで切実ですから、法律がダイナミックに変わってきました。法律も日本よりすぐれたものがたくさんできています。「ふゆみず田んぼ」や「動物保護と環境保護」の農業を考える人たちが共にフォーラムを開いたり、勉強を始めています。割りばしを使わないとか、使い捨てをやめようとか法律もどんどん変わっています。これから韓国でアメリカンスタイルのファストフードがどうなるのかも興味あります。マクドナルドが根づきにくい国として、フランスと韓国が上げられるのですが、共通しているのは独自の文化が残っていることです。日本も日本らしさを取り戻さないと、農業にも未来はないのではないのでしょうか。

競争はものまねでやっても、勝てるわけはありません。自分たちの知り尽くしたテリトリーではないところで闘っていたら当然負けますよ。いま流通業でやっていることは全部逆じゃないかと思えます。

いまはいいものを作っても売る場所がないという心配があるから、流通業と農業、経済と教育、すべてを合わせた勉強会とか、そういう機会をいっぱい作ったらどうかと考えています。それに、作った人が売る人を探すのではなく、自ら売る力をもてば、そちらのほうが早いんですね。素材より製品のほうが付加価値高いに決まっていますし。

長期的な視点と教育

いま地球で起きている問題は、長期的な計画で臨まなければならないものばかりです。これまでのように短期的なパラダイムでは解決つきません。20世紀のパラダイムじゃなく、21世紀のパラダイムでなければダメです。はじめから答えなんてないのです。答えは自分たちで作っていかねばなりません。役者が自ら台本を作りながら進むような。変わらなければいけないのです。変化がいま求められているのです。

企業も、社会の不足、不満、問題を解決することを存在根拠とするという認識をもったところが揃わなければ、未来を構築することなどできないと思えます。そんな大人のしっかりとした後ろ姿を子どもたちに見せたい。大学生もせっかく勉強するのなら、40%しかない自給率をあげようとか、蔓延している毒入り食品をどうしようとか、意欲や意思をもって社会に出てきてほしいです。子どもに示せるもの、残せるものはただ一つ、後ろ姿だけです。お金でもなんでもありません。そして、子どもにとっての最大の栄光は責任、子どもに大切なのは自覚です。そのためにも未来をつかっていく者としての教育が重要です。使命感のない学校なんてありえないですよ。子どもが卒業後にそつなく食べていけるように育てるだけなら、役目を果たしていることにはなりません。企業もそういった役目を果たせるようになっていかなければならないと思っています。自らが自分たちの足場を滅ぼしてしまわないように。

ガーデンの可能性と役割

さて、ガーデニングですが、ガーデニングと言っ

も、花だけがガーデンをつくるわけではないですね。野菜でだって、野生の植物でだってガーデンができます。北海道では北海道にしかないような自然を生かしたガーデニングをしたらいいのではないのでしょうか。今日は、専門の先生のお話をお聞きできるので、とても楽しみにしております。「えこりん村」では、北海道の草、木など植物の種を集めています。いま423種類集まりました。

アイヌ民族はオオウバユリの根を食べていたのですが、どうも発酵食品にして食べていたらしいのです。その加工の仕方がわからないので、いま資料を一生懸命探しています。アイヌも古くから発酵食品を食べていたのです。日本書紀には「伝統野菜アタネ」という植物が出てきます。カブの1種なんですけど、その種がみつかりました。アイヌの方々と懇意にさせていただいてますと、そんなうれしい情報もちょくちょく入ります。そのアタネは栽培可能だということで、挑戦してみることにしています。

キッチンガーデンは、何%かでも一般家庭での自給率アップにつながります。スモールメリットの代表選手と言えるのではないのでしょうか。

「えこりん村」では、一つの株から1万個以上のトマトを作ろうという挑戦をしています。ストレスを与えないとよく育ちます。ストレスを与えると、自分で成長を抑えますね。つくづく、ガーデニングと言っ

て人間が野菜なり花なりを育てているつもりでいるけれど、実は植物自体が成長を決めているんだと実感します。そのトマトも自分の人生を自分で決めているというのがよくわかります。完熟したものは収穫して加工して商品にしています。完熟させるので、活性酸素を抑える働きのあるリコピン酸は市販のトマトの1.5倍も含まれています。内容の濃いものをいっぱい作れる。うれしいことです。いっぱい作れば、循環もできます。

デンマークで訪れた小さな住宅地は後ろが畑になっていました。家から500メートルほど離れたところには柳が植えてあって、枝はチップにして燃料になります。柳は芽さえあればまた出てきますし、成長が早いです。生ゴミなどもいい土づくりに利用して、循環させていました。

東洋に風水ってありますね。ナチスドイツの時代には、風水でいいからといろんなものが集まってきました。磁場が高い、事故が少ない、風水がよって言いますね。緑や水を自分の周りに置くことを陣を張るっていいです。自分を守るために軍隊を送って陣地を作

るのとは違って、緑や湖の陣を張る。湿度を保ったり、環境をととのえる。だからガーデニングというのは自分の家の周りに陣を張るってことになるんです。そういう展開は、とても面白いでしょう？自分の周りに、一番いい環境をもつことになるのです。生態系ほど多くを学べるものはないと思います。

家庭の単位での自給率アップを図ることができ、自分の周りに陣を張る、それがガーデニングです。そのことによって、いまを生きることに汲々とするのではなく、意識を進化させなければいけないことに気づくこともできるでしょう。意識というのは、環境を受け取って、それに反応したり順応することで生まれてきますが、それもただ反応、順応だけでは動物と同じ。そこに創造性が生まれてきて初めて意識の進化につながります。ただ生きるというのではなく、そこに庭というものを持ち込むことによって、家を支えもするし、環境も人もよくなると思います。

三分の余裕

私たちは「食」という字を「人を良くする」と読みます。お客様を考えない事業は成り立ちません。これは当然のことです。北海道も「産消協同」といって、産地と消費者が協同するプロジェクトを立ち上げました。21世紀を見た場合、お客様のことを考えるという言葉ではたりないくらいのこと、本質に厳しく迫ることが私たちには要求されていると考えています。私たちがお客様のことを考えるのは「情けは人のためならず」です。結局、すべて自分たちに返ってくるのです。私たちには、お客様と自分たち、そしてそのほかにもう一つ、社会なり、農業なり、環境なりを加えてトライアングルでものごとを考え、進めていく能力が要求されています。それはいますぐの利益にはならなくても、必ず個性へと反映され現れてくるものです。自分たちらしさというか、他とは絶対的に違うものとしての土壌、基本ができあがってくるのだと思います。

アレフには三分の余裕という考え方があります。お金、人といったパワーの3割は未来のために使うということです。新しいことに着手するといろいろなことがあります、何かあればちょっとお休みすればいい。そういう余裕をもたない事業は心細いです。ガーデニングも、そんな余裕につながるものがあるのではないのでしょうか。未来を見て、いま手がけるという余裕です。いま食べるためだけに生きていたのではできない

ことです。すべてが進化しなければならない時代で、意識の進化も求められています。ガーデニングはそのための環境づくりの一環と言えらると思います。

ガーデニングのできる生ゴミのリサイクルは、循環型の社会の実現へのとてもいい例です。一つひとつの小さな循環がつながって、やがて大きな輪を作ります。それこそが生態系が求めていることだと思います。私たちアレフも生態学的企業として、汚いものを吐き出さない生き方をしようと取り組みを進めています。恵庭ならではの皆さんの取り組みと一緒にアレフも大きな輪に加わって、共に未来を築いていきたいと考えています。

長い時間にわたり、ご静聴ありがとうございました。

(2006年9月8日恵庭市民会館にて)